

興福寺所蔵『春日社經藏經論注文』

歴史研究室

本年も興福寺所蔵の古文書・典籍の調査・整理を行うとともに、『興福寺典籍文書目録』第2巻の刊行準備を行った。ここでは目録第1巻収録分の第13函2号『春日社經藏經論注文』を紹介する。

まず本書の書誌を記すと、体裁は袋綴装、料紙は楮紙で、後補表紙と素紙原表紙がある。縦29.0cm、横23.3cm、紙数は原表紙を含め9紙である。界線はなく、一面ほぼ10行であるが、第8紙は縦紙を一紙綴じ込み、その一面に書写している。

本書は原表紙の左下に「検校（花押）」とあるが、第2紙に「于時享徳三年^甲三月十六日以古本書之／検校少僧都尋尊（花押）」とあるので、康正元年（1455）から長禄三年（1459）まで興福寺別当であった大乗院尋尊の書写にかかることが知られる。表紙外題には「春日社經藏經論注文」とあるが、これは冒頭の「春日御經藏被納經論等目録」を指すもので、目録以外にその関連事項も記されている。

春日社にはいくつかの經藏があったが、本書の經藏は一切經藏と称されたもので、春日本社の西方にあったらしい。その起源は第2紙裏にも一部記されているが、寛治6年（1092）7月に白河上皇が金峯山詣をした時、急病になり、春日神の咎めということで、春日社頭で毎日不退の一切經読誦を発願したことにある。翌寛治7年3月には上皇の春日社行幸があり、康和2年（1100）7月6日には一切經を書写し、その供養を社頭で行い、同15日に一切經読誦を始行している。その供料として越前国河口庄が施入された。その一切經藏の經卷の収納状況を、文永元年（1264）10月に賢位惣藏司が書き上げたものを尋尊が享徳3年（1454）3月に書写したのが「經論等目録」である。一切經藏には文永元年までには一切經の他、多数の經卷が納入されていたことが知られ興味深い。春日社に成唯識論をはじめとして多数の經卷が施入されたことが種々の記録にみられるから、それらの中にはこの經藏に納められたのもあろう。經卷以外には、供料庄園関係の重書や一切經藏の經卷を用いる社頭法会執行に関する文書記録類も共に保管されていた。

「經論等目録」以降は尋尊が書き加えた事項である。「件検校職相伝次第」は一切經藏と供料庄園を管轄した検校の次第が記されており、別当クラスの僧が任じられているが、尋尊は「經論等目録」の末尾にあるように享徳3年に検校職にあった。「相伝次第」の次には毎日の転読を行う一切經衆百口の記載がある。百人を5番20人ずつに編成し、1番が6日ずつ転読を行い、1か月で一巡する。百口のうちに惣藏司5人がおり、うち1人が惣藏司で、検校の代官として經藏のことを全て奉行した。社頭転読の組織が具体的に知られる記事である。ここまで記載は同時に記されたとみられ、本来の本書の内容と思われるが、以下の金泥唯識論書写等の記載は尋尊筆であるがやや調子を異にしており、後に付加されたのであろう。

（加藤 優）

(塗番帳一枚 古経衆交名等書之)
〔×也〕

前机一前

自古今着到等

已上賢位惣藏司之時見及承及分謹注進之

文永元年十月 日

干時享徳三年甲戌三月十六日以古本書写之

検校少僧都尋尊(花押)

○件検校職相伝次第

○白河太上天皇御願 寛治六年於金峯山御發願子細檢記ニアリ

康和年中件一切經被書之供料越前国

河口庄十郷アリ 本庄郷 溝江郷 細呂宜郷 兵庫郷

新郷

王見郷 関郷 大口郷 荒居郷 新

庄 山荒居郷

南門之御經藏之額文ハ伊房卿筆跡也

最初検校

大乗院本願法印隆禪

〔元〕

竜華院法務大僧正覺 〔元〕

僧正範俊 花林院權僧正永縁 中僧正玄 法印經尋

中僧正玄 〔元〕 権僧正隆覺 法雲院法印覺譽 修學坊僧都覺晴

〔元〕 権僧正隆覺 法眼定耀 僧正惠 〔元〕 法眼玄修 権僧正玄縁

〔元〕 権僧正範縁 権僧正覺憲 権僧正範玄 二条法務大僧正雅縁

井山本願大僧正信 〔元〕 後井山大僧正実 森本大僧正円 〔元〕

藏司

承仕

五人 但百口之内也 此内一口惣藏司検校代官也

(3才)

(2ウ)

(4ウ)

円実勤勵之時且被捕之依常盤井相國揮門申請也

〔円実ノ注ナリ〕
小童之時相伝之
井山兩代ハ彼代官也

法印権大僧都実守 ○森本大僧正円 宝峯印大僧正尊

〔元〕

大慈三昧院大僧正慈 〔元〕 後内山大僧正尋 五大院大僧正覺

〔元〕

〔元〕

大慈三昧院大僧正慈 〔元〕 後内山大僧正尋 五大院大僧正覺

〔元〕

〔元〕

己心寺大僧正孝 〔元〕 九条僧都教 〔元〕 後己心寺法務大僧正孝

〔元〕

〔元〕

後宝峯院大僧正孝 〔元〕 安位寺大僧正経 〔元〕 尋尊

〔元〕

教尊之下ニ可有教信禪師也

一切經衆百口

〔青花良家凡人加皆之
參社頭転讀之〕

一番 自 一日至 六日 廿人

二番 自 七日至十二日 廿人

三番 自十三日至十八日 廿人

四番 自十九日至廿四日 廿人

五番 自廿五日至晦日 廿人

此外

准一切經 一人

輪転衆 十五人

真言經衆 五人

五人

